

〔原 著〕

『チャタレイ夫人の恋人』に描かれる狂気と母性、そして女らしさ

Madness and Motherhood, and Womanhood in *Lady Chatterley's Lover*

林 姿穂¹⁾

【要 旨】

D. H. ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』では、主人公コニーの狂気と母性の相互関係が描き込まれている。コニーの苛立ちや不安の原因は、家父長制による抑圧であり、作品が執筆された当時のイギリス人女性の問題と共通している。本研究を通して、第一次世界大戦前後のフェミニズムの動向や女らしさの通念を歴史的背景から確認することで、男女の役割の変化、産児制限に伴う性的活力の欠如が狂気の要因であることが明らかになった。コニーの精神状態の変化の過程を考察すると、当時のイギリスの既婚女性のヒステリー症の症状や妊娠に関する古典医学の見地を想起させるものであることが確認できた。性的欲望を満たす方法を知っているボルトン夫人は狂気に陥ることはなく、コニーとは対照的に描かれている。よって、ロレンスが描く狂気と母性、そして女らしさは、歴史的な女らしさの通念や古典医学の狂気の見地と深い関連性があるとみなすことができる。

【キーワード】 D.H. ロレンス 狂気 母性 女らしさ 性的欲望

I. はじめに

第一次世界大戦中に負傷し、それでも一命はとりとめて帰還した、クリフォード・チャタレイは、下半身が麻痺しているために、妻のコニー（コンタンス・チャタレイ）と肉体関係を持つことができない。クリフォードはコニーが自分以外の適切な男性と肉体関係だけを持ち、コニーが妊娠して、後継ぎを産んでくれさえすればと願うのであるが、コニーは彼の期待を裏切る行動に出る。彼女はクリフォードが忌み嫌うメラーズと肉体関係を持ち、妊娠して彼と家庭を築くことを望むようになるのである。

家庭的な幸福をコニーが求めようとするところで物語が終わるので、家庭の領域に女性が収まることの幸福が教訓として描かれているのではないかと一見読者に感じさせる。しかし、コニーの性的欲望やメラーズとの不倫関係を描くために用いられる多くの卑猥な表現を考慮に入れると、この物語がそのような単純な教訓を意図して描かれているとは考えにくい。

これまで、この作品の解釈や作品に反映される作家の意図については、さまざまな議論がなされてきた。例えば、ローゼンハンは理性のみに重きを置くクリフォードの価値観よりも、性的欲望も含めた感情面での男女の結びつきのほうが優位にあると解釈し、感情の優位性がテーマとして描き込まれていると主張する¹⁾。同様に、コニーとメラーズの品位について、ダレスキーは、読者に衝撃を与えるような卑猥な表現でメラーズが性的な話題について話しているものの、それらの卑猥な言葉が、上品に使われるために、優美な響きを奏で、彼と性的関係を持つコニーの尊厳までもが保たれていると主張している²⁾。これらの批評は、ロレンスの描く登場人物たちの階級意識の欠如や不倫を芸術の一部だとみなすものである。そして、登場人物たちの卑猥な言動を肯定的に捉えるものである。

これらの批評家が、コニーとメラーズの尊厳を主張する一方で、女性の受動的な態度や男性への服従が描き込まれていると解釈する批評家もいる。例えばミレッ

受付日：2021年1月13日 受理日：2021年5月12日

1) Shiho HAYASHI：三重県立看護大学

トは、一見、女性の欲望を描いたように見えるが、実のところは男性の満足感と女性の従属的な立場を強調しているに過ぎないと言う³⁾。スクワイアも、同様に、コニーとメラーズの肉体関係に着目しているものの、ミレットとは異なる解釈をしている。スクワイアは、二人の一体感や調和が作品に描きこまれているために、女性が服従するような場面はごく一部にすぎないという⁴⁾。そして、メラーズの燃え立つような官能的刺激が、コニーの恥らいを払拭し、彼女を精神的に自立させ、社会の規範からも解き放ったのだという⁴⁾。しかし、ミレットやスクワイアは肉体関係の描写のみに着目しているために、この作品の中心的なテーマでもある狂気と母性の関係性を看過している。

妊娠適齢期であっても妊娠する機会を逃し、それでも妊娠を強く願うコニーの欲望が狂気の根本原因であり、それが、作品の冒頭で繰り返し描かれているにも関わらず、このことに着目する批評はこれまでほとんどなかった。そこで、本論では、物語の冒頭で、狂気な一面を見せるコニーが妊娠し、母としての使命を自覚するまでの過程に焦点を絞って、作品の新たな解釈の可能性をさぐる。まずは、イギリスにおける歴史的な女らしさの概念や、作品が執筆された当時のフェミニズムの動向を確認する。その上で、作品に描かれる狂気と母性の関連性、そしてロレンスが描き出す女らしさについて論じていきたい。

II. イギリスにおけるフェミニズムと『チャタレイ夫人の恋人』

『チャタレイ夫人の恋人』が初めて世に出たのは1928年であり、第一次世界大戦が終結し、イギリスで女性参政権が認められた、その約10年後にあたる。第一次世界大戦中、一時的に兵役のために男性が不在になったイギリスでは、女性でも力仕事や車の運転をするようになっていた。外面的には男女平等への一途をたどっていると思われていたが、男性が戦地から帰還するや否や、女性はまた家庭の領域に引き戻されたのである。

この作品に登場する女性の登場人物たちは、第一次世界大戦以前に求められた女性らしさやその役割をある程度認識しつつも、家父長制による抑圧に耐え、自己の能力と可能性を見出して自立しようとしている。このことから、彼女らは、第一次世界大戦後の女性像

を体現していると言えるだろう。

例えば、看護師ボルトン夫人は初老の未亡人であるが、彼女は経済的な自立を果たしている。その一方で、一昔前の、18世紀後半のイギリスの教育観や女性観を重んじる典型的な女性のようにも見える。イギリスの女子教育は、数世紀に渡って、ルソーの教育観の影響下にあり、女性は「男性の気に入るような」⁵⁾ 振る舞いができるよう教育されてきた。また娘を持つ母親は「男性の心をそそる」⁵⁾ よう教え込む役割を担ってきた。特に18世紀末ごろ、多くの母親は、娘をかつてないほど長い間、自分の手元に置き、娘に使用人や家庭内での調整事が無駄なく管理できるよう、そして、古典的な立場を取る男性に挑戦したり脅威を与えることなく、調和を保ち、欲望は内面化するよう教育していたとストーンは指摘している⁶⁾。ボルトン夫人の母親の世代がこのような教育観を持っていたと仮定すれば、ボルトン夫人がその思想を引き継いでいたとしても何ら不思議ではない。ボルトン夫人は常に男性との調和を保ちながら、雇い主の男性に媚びつつ、経済的な基盤を築いているからである。

一方、コニーの母親は不在である。コニーは男性に従順であるよう教育されておらず、男性と同等の高い教養を身につけている。そのため、男性である夫の友人と対等に議論し、挑戦的な態度を示す。彼女には古典的な女らしさのイメージは全くなく、家父長制を脅かす女性として描かれている。それでも、彼女は母となり、円満な家庭を持つことを強く望んでいる。

この作品には、コニーの生々しい性的欲望とボルトン夫人の金銭欲も描き出されている。19世紀後半までは、女性の欲望は男性によって満たされ、適切にコントロールされるべきだと考えられるのが一般的であった。しかし、第一次世界大戦以降は、フロイトやマルクスの思想の影響を受け、理性や自我といった人間の内面の問題に人々は関心を持つようになった⁷⁾。その結果、ロレンスだけでなく、ジェームス・ジョイス、バージニア・ウルフのようなモダニズム文学を代表する作家たちは、母親の自我を描くようになったとラーデマッヘルは指摘する⁷⁾。これらの作家たちが描く母親像には過度な自己愛の傾向があり、母親たちの性格は、アメリカ精神医学会 (APA) が1980年に提示した、自己愛性パーソナリティ障害の診断基準 ('Diagnostic Criteria for Narcissistic Personality Disorder')

の多くの項目に当てはまる^{7)注1)}。その一方で、モダニズム文学の中の母親たちは、自我を持たない、古典的な母としての振る舞いもしており、次世代を担う子どもにも悪影響を与えることはない⁷⁾。彼女らは、19世紀までに重んじられた教育観も持っているのである⁷⁾。つまり、モダニズム文学の母親像には二面性があるということがわかる。

『チャタレイ夫人の恋人』においてもラーデマッヘルが指摘する二面性のある母親像が描かれている。ポルトン夫人は、極度に冷淡で、男性患者たちを、子どもと同等で、自分より劣ったものと見なしている。彼女は高慢な女性であるが、主人に対しての従順な態度を忘れることはない。一方、コニーは高い自尊心を持っているので男性に対して挑戦的であるが、妊娠前は、母親になれない自分に強い劣等感と不安感を抱いている。妊娠後はクリフォードにとっての脅威にはなるが、円満な家庭を持つこと、そして子どもの養育環境を整えることを重んじるので、古典的な母親らしさも見て取れる。

コニーがクリフォードとの結婚生活の中で抱いた親になれない不安については、当時のイギリス人の多くが経験していたと考えられる。第一次世界大戦中、女性はこれまで男性の役割だと考えられていた仕事をこなすだけでなく、頭脳労働も求められるようになった。ショーウォーターによると、当時、イギリスにおいては、医学的観点から、女性が頭脳労働に従事することはエネルギーの消耗につながり、生理不順や不妊を引き起こすと考えられていた⁸⁾。エネルギーの消耗は無気力や苛立ちに繋がる⁸⁾。このような苛立ちは、ヒステリー症と呼ばれたこともあり、1870年から第一次世界大戦頃までは「ヒステリー症の黄金期」と言われるほど精神に異常きたす女性が増加していた⁸⁾。その一方で、ヒステリックであること、すなわち、感情の起伏が激しいことは、文学上では、女らしさを意味するようになっていた⁸⁾。ショーウォーターは、高学歴のイギリス人女性が増加する一方で、男性側は、従順で多産な女性を国外に求めなければならないという危機感を抱いていたと示唆する⁸⁾。高い教養を身につけたコニーは、将来的に母親になれるかどうか、誰の子を妊娠するのか、家族や育児の位置づけとは何かといった自らの問題に直面し、妊娠前と妊娠後で感情が激しく変化するので、文学上では極度に女性らしい存在で

もある。

イギリスの社会現象としての「ヒステリー症の黄金期」⁸⁾とフェミニズム運動の高まりはある程度連動している。バンクスによると、1870年代ごろから、フェミニストたちは、女性が「単なる子を産むための機械」⁹⁾とみなされてはならないと主張しはじめ、「幸福に生まれてくる子どもだけに数を限定することが重要である」⁹⁾と訴えていた。このような産児制限の動きは、男性に性的な自制を要求することをも意味していた。すなわち、女性の貞潔の基準が男性にも適応されつつあったのである⁹⁾。その一方で、このような自制によって、男女双方において、性的関係を持つ機会が減るために、活力が欠如して、ヒステリー症が蔓延することも危惧されていた⁹⁾。『チャタレイ夫人の恋人』の中では、肉体関係が全くない結婚生活によって生じる、コニーの苛立ちや活力の欠如が繰り返し描かれている。コニーはこの時代の女性の典型であり、不妊によるヒステリー症を想起させる。一方、クリフォードは極度なまでに性的な衝動を持たない男性として描かれる。コニーの親族や主治医はともに、彼女の精神異常や衰弱を認めている。ロレンスは、夫婦関係と性における一般的な問題を、コニー個人の問題に置き換えて、それを作品の第1章から第10章までに描き込んでいるのである。

イギリスでは19世紀末から20世紀初頭にかけては、社会的にも文学的にも、貞潔の基準が揺らいでいたといえる。中でも、ミルの『女性の解放』(1869)の出版は、貞潔の基準を揺るがす大きなきっかけになっていた。ミルは既婚女性が主人に仕えるのだとしたら、一生に一回だけの結婚で主人を決めるのではなく、何度でも夫を変える自由(再婚の自由)が認められてしかるべきという極論さえ存在しうると言う¹⁰⁾。ここで、ミルは再婚の自由を強調しているのではない。どれほど家庭における女性の立場が抑圧されたものであるかをこの書で主張したのである。同著では、女性の奴隷(家の使用人)であれば主人からの性的関係の強要を断ることもできるのであるが、家庭の妻には配偶者である主人から同じことをされても断る権利すらないと語られる¹⁰⁾。それゆえ既婚女性は奴隷以下の境遇であると論じられている¹⁰⁾。一方、文学上の女性、特に家庭内の母親にも、ミルの主張と同様の境遇が描かれている。リッチは、19世紀の小説に登場する母の役割

について「自分の娘たちに、男性のご機嫌取りをすることで、父権制の中で生き延びる策略を教え込むことだ」¹¹⁾と述べている。小説の中の母親像も従属的であり、その従属性は次の世代にも引き継がれるかのように描かれている。『チャタレイ夫人の恋人』の背景は20世紀初頭であるが、この小説では、リッチの述べるような古典的な母親らしさが徐々に消失しつつあることが描かれている。

バンクスは19世紀末の現実世界の女性たちは、家父長制による抑圧や束縛から徐々に解放されつつあったという⁹⁾。彼女らは、男女間の友情を楽しむことや、煙草を吸うこと、自宅の表戸の鍵を所有することも認められるようになっていた⁹⁾。それが、離婚や母性の束縛における極度の弛緩をもたらせたのである⁹⁾。この恩恵を受け、自由を手にした女性たちは今までにはない女性のイメージをまとうようになった。自由で家父長制から解放された女性は一般に「新しい女性」(ニュー・ウーマン)と呼ばれていたことはよく知られている。このような女性像の歴史的な変化が作品に反映されたのであろう。コニーのイメージも当然「新しい女性」を意識して描かれたに違いない。コニーは自分の家の鍵を持たされてはいないものの、自由に家を出入りしている。クリフォードの身の回りの世話は看護師のボルトン夫人に任せ、夫の束縛から解放されるばかりか、彼女の不貞行為までもが黙認されてしまう。当時のイギリス社会では、上流階級の既婚女性は、使用人や乳母に家事や育児を任せ、自由な時間を持つことがステータスとされていたが、物語では皮肉にも、そのステータスがもたらす余暇がきっかけとなって、彼女が自らの欲望に気づき、母性に目覚めてしまう。そして、メラーズとの生活を望んで夫との離婚を決意するのである。

山田は、不倫相手であるメラーズのイメージについて、炎のイメージを伴うものの、暗さを好む黒いイメージの男性で、白い女性のコニーとは対照的であると指摘する¹²⁾。その対照性は主従関係を生み出すものではなく、単なる違いに過ぎない。ここでいう黒さや暗さは、メラーズの極度に内向的な性格や、階級意識、結婚制度に縛られない生き方を意味している。一方、コニーの白さは、典型的な上流階級の白人の既婚女性であること、また活力の欠如によって青白い表情をしていることを意味している。しかし、作家は黒と白のイ

メージに優劣をつけているわけではない。メラーズの炎は活力が低下しているコニーを温め、復活させる役割を果たす。メラーズの炎は、社会的地位の境界線や家族のしがらみを消し去る役割をも果たしている。メラーズがコニーの病を回復に導く点において、両者は医師と患者の関係を想起させるが、二人の間には、医師と患者、男性と女性といったような主従関係は存在せず、絶えず対等な関係が維持される。

Ⅲ. コニーの狂気

作品の第10章でコニーがメラーズに出会う場面が描かれるが、この場面に至るまでの第1章から9章までは、一貫して彼女は、介護のために憔悴し、青白く、病的なイメージをまとっている。メラーズに出会う以前のコニーには主体性がなく、常に男性にコントロールされていた。彼女の病状についても男性の視点から観察され、判断が下されていた。

まず、語り手が、コニーの精神状態について、どのように説明づけているかを確認しておく。

Connie, however, was aware of a growing restlessness. Out of her disconnection, a restlessness was taking possession of her like a madness... It thrilled inside her body, in her womb, somewhere, till she felt she must jump into water and swim, to get away from it: a mad restlessness. It made her heart beat violently, for no reason. And she was getting thinner.¹³⁾

(20; ch. 3)

この引用から、コニーの病は精神的なものであることがわかる。引用の、「狂気に似た不安感」(“a mad restlessness”)¹³⁾、「子宮の内部に戦慄を与えるような不安感」(“It thrilled inside her body, in her womb”)¹³⁾という部分からは、ヒステリー症または現代でいう鬱病を想起させる。また、狂気に似た不安感によって「ひどい動悸が起こる」(“It made her heart beat violently”)¹³⁾という症状は、心疾患を思わせるが、このことについて、コニーを診断した医者は次の引用のように話している。

Your vitality is much too low: no reserves, no reserves. The nerves of the heart a bit queer already: oh yes! Nothing but nerves ...

You're spending your life without renewing it. You've got to be amused, properly healthily amused. You're spending your vitality without making any. Can't go on, you know. Depression! A void repression!"¹³⁾ (78; ch. 7)

コニーの不安感は、うつ病だけでなく、「心臓の神経」(“The nerves of the heart”)¹³⁾の不調だと見なされている。医者があまりにも曖昧な表現でコニーの症状を説明するために、一般の読者には、その症状が理解できない。しかし、「心臓の神経がすでに少し変になっている」(“The nerves of the heart a bit queer already”)¹³⁾という部分に着目すると、ヒポクラテスの時代の医学的見地から病状について語られていることがわかる。古典的な医学の観点では、子宮が肝臓以外の臓器、例えば心臓に固着すると不安、めまい、嘔吐を引き起こすと考えられていた¹⁴⁾。改善策としては、既婚女性には、子宮がある程度湿っていて正常な位置に保たれるように性交させ、未亡人に対しては妊娠することが勧められていたという¹⁴⁾。古典医学では女性の子宮は子どもを作りたいという願望に取りつかれた生き物だと捉えられていたので、妊娠適齢期の既婚女性の不妊の状態が長期間におよぶと、命にかかわるほどに苛立ち、あらゆる種類の病気を引き起こすと考えられていたのである¹⁴⁾。ユベルマンによると、19世紀末頃は、ヒステリー症の女性に対し、子宮頸部を焼灼したり、鼠頸部に拳を沈ませ卵巣を圧迫することで発作を抑えるなどの処置がとられていた¹⁵⁾。そして、改善が見られない場合は、子宮を摘出することもあったという¹⁵⁾。コニーの経験した、不安感や動悸の原因は彼女の不活発な子宮にある。ロレンスにどれほどの医学的知識があったかは定かでないが、作品ではたびたびコニーの子宮の動きについて言及される。肉体的な実践をすすめる古典医学と、性的快楽によって得られる女性の健康を描き込むロレンスの視点は重なり合っている。しかし、この作品に登場する医師は健全な娯楽の時間を持つことを勧めるだけで、性的欲望を満たすことの必要性については一切言及しない。特に男性が女性の欲望をコントロールするものだと考えられていた時代において、夫のクリフォードの下半身が麻痺していたので、医師はあえて彼の夫としての不甲斐なさには言及しなかったのであろう。

その後、コニーは、医師に頼ることなく、自分の力

で不安感を取り除く術を見出していく。最初に描かれるマイクリスとの肉体関係で、コニーは子どもを守ろうとする母性本能に似た感覚を覚え、一時的な回復の兆しを見せる。この場面における二人の関係は医師と患者のような主従関係を想起させる。

He looked up at her with the full glance that that saw everything, registered everything. At the same time, the infant crying in the night was crying out of his breast to her, in a way that affected her very womb... “Oh, in that way!—May I hold your hand for a minute?” he asked suddenly, fixing his eyes on her with almost hypnotic power, and sending out an appeal that affected her direct in her womb.¹³⁾

(25; ch. 3)

マイクリスの行為と言動は、彼女の子宮を動かす。彼の「子どもの夜泣き」(“the infant crying in the night”)¹³⁾のような声はコニーの妊娠の可能性の予兆となり、コニーに希望を抱かせる。そして、その声は、「彼女の子宮そのものを動かす」(“... affected her very womb”)¹³⁾のである。また、マイクリスが催眠術をかけるように、コニーを見つめる場面は、催眠術がヒステリー症の治療法として使われていたことを思い起こさせる。マイクリスとの肉体関係を持つてから、しばらくは、コニーは快活にふるまうようになるのであるが、その後、自分が従属的であると感じ始めたコニーは次第に不満を募らせる。コニーは、男性と対等になり、心も身体も満たされる関係を求めるのであるが、マイクリスはそれを満たすことができない。次の引用はその時のコニーの心境を示している。

Now the mental excitement had worn itself out and collapsed, and she was aware only of the physical aversion. It rose up in her from her depth: and she realised how it had been eating her life away.

She felt weak and utterly forlorn. She wished some help would come from outside.¹³⁾

(97; ch. 9)

コニーの病は、肉体的な実践で一時的に回復することはあっても、実際に妊娠しない限り完治することはない。よって、マイクリスはコニーの性的欲望を一時的

に満たしただけで、コニーの活力を回復させることはできない。単なる官能的刺激だけでは欲望が満たされないことをコニーは自覚する。この頃から、コニーは男女の対等な関係性の中で子どもを持つことを望むようになる。そして妊娠し、母親の役割を果たすこと以外に回復の見込みはないと自覚する。

IV. コニーの妊娠、狂気から正気へ

第10章は、コニーが、精神的な健康を取り戻す重要な章である。第10章のはじめで、コニーは、クリフォードに、子どもを産んで欲しいかどうかを尋ねる。このことは、妻が他の男性との肉体関係を持つことを許容できるか否かを意味する。その場面でクリフォードは、互いの愛情さえ変わらなければ問題はないと返答する。しかしコニーは、対等な友愛関係のもとでの、妊娠と出産、そしてその子どもの養育を強く望んでいる。クリフォードとの会話のやり取りで、家族のありかたについての相違を実感したコニーは深く傷つき絶望するが、彼女は、欲望を満たすために何をすべきかを、自主的に模索するようになる。

憔悴したコニーを回復に導いたのは、家を離れるための余暇と自由、そして様々な母子関係との接触である。第10章に描かれるメラーズの小屋で、コニーは雌鶏と生まれたての雛の姿を目にして、ある種のカタルシスを得る。さらに、同章では、フリント夫人が自分の赤子をコニーに見せびらかす場面が描かれている。コニーは子どもを持ちたいという欲望に正面から向き合うことになる。そして、その欲望は子どもを持つための主体的な行動へと変化していくのである。

マイクリスの「子どもの夜泣き」の場面も含めると、物語のはじめから第10章の終わりに至るまでに、三度も母子関係が描き込まれていることになる。二回目に描かれる母子関係はメラーズの小屋でコニーが目にする雉の雛と母親である。この母子関係を見た時のコニーの心の内は次のように語られている。

And one day, when she came, she found two brown hens sitting alert and fierce in the coops, sitting on pheasants' eggs, and fluffed out so proud and deep in all the heart of the pondering female blood. This almost broke Connie's heart. She herself was so forlorn and unused, not a female at

all, just a mere thing of terrors.¹³⁾

(113; ch. 10)

雉の雌鶏を見たコニーは、「彼女は全く孤独で、女の役目もせず、全く女性とも言えない」(“She herself was so forlorn and unused, not a female at all”)¹³⁾ 自分自身に気づく。しかし、その後、コニーは次第にこの雌鶏に親しみを覚え、雌鶏に手を差し伸べ同化していく。

Connie found corn in the corn-bin in the hut. She offered it to the hens in her hand. They would not eat it. Only one hen pecked at her hand with a fierce little jab, so Connie was frightened. But she was pining to give them something: the brooding mothers who neither fed themselves nor drank...

Now she came every day to the hens: they were the only things in the world that warmed her heart.¹³⁾ (113; ch. 10)

「自分で食べようとも飲もうともせぬ巣ごもった母性」(“the brooding mothers who neither fed themselves nor drank”)¹³⁾を見たコニーは雌鶏の自己犠牲に感動する。メラーズの小屋で彼女の心は徐々に暖められていくのである。雌鶏との触れ合い、雌鶏に共感することで、コニーの魂は浄化され、彼女の苛立ちも消えていく。炎のイメージをまとうメラーズの小屋は、コニーの精神状態を回復させる場所となる。

それに反して、クリフォードは、たとえコニーが別の男性との子どもを産んだとしても、その後の子どもの養育の責任について考えようもしない。クリフォードの子どもに対する無責任な態度と、必死に雛を育てる雌鶏は対照的である。ロレンスは意識的にこの対照性を描き込んだに違いない。なぜなら、ロレンス自身も、子どもを育てることの責任を強く感じたことがあるからである。

ロレンスは、メラーズと同様に階級差のある不倫関係を経験し、貴族出身のフリーダ・ウィークリーとの間に、子どもを持ち、育てることを夢見ていた。ロレンスはフリーダへの書簡の中で「子どもを持つというリスクではなく、育てる責任というリスクを負わなければなりません」¹⁶⁾と記している。ロレンスは、子育ての責任は、平等に二人で負うものだと感じていたのである。母親の育児の負担を軽減すべく、子どもの数

をコントロールするために男女共に貞潔が求められた時代において、ロレンスは育児が女性特有の役割と捉えるのではなく「育てる責任」¹⁶⁾を男女が平等に負うものだと考えていた。それゆえ、妊娠のリスク（「子どもを持つというリスク」¹⁶⁾）は男女が平等に負うべきリスクだと感じていたのである。このようなロレンス自身の妊娠と育児に関する考えが、雌鶏への敬意とクリフォードへの軽蔑という形で作品に反映されている。

また、ロレンスは子どもを持つことはリスクでなく、むしろ幸福だと捉えている。コニーはフリント夫人の赤子を目にし、嫉妬心を抱くが、この場面には、母親の役割が与えられることで女性は幸福になるのだというロレンスの考えが反映されている。

How warm and fulfilling, somehow, to have a baby. And how Mrs Flint had showed it off: she had something, anyhow, that Connie hadn't got and apparently couldn't have. Yes, Mrs Flint had flaunted her motherhood. And Connie had been just a bit, just a little bit jealous. She couldn't help it.¹³⁾

(132; ch. 10)

フリント夫人は「コニーの持っていない、あきらかに持てそうもないものを」(“she (Mrs Flint) had something, anyhow, that Connie hadn't got and apparently couldn't have.”)¹³⁾ 見せびらかし、コニーに嫉妬心を抱かせる。しかし、コニーは、メラーズと肉体関係を持つことで、嫉妬心からも解き放たれていく。コニーの不活発な子宮はメラーズとの肉体関係によって、もはや、臓器に固着して心の病を引き起こすようなものではなくなっている。「もう一人の自分が彼女の中で生きていて、彼女の子宮や、内臓の中で柔らかく溶けて燃えていた」(“Another self was alive in her, burning molten and soft and sensitive in her womb and bowels.”)¹³⁾ という部分は彼女の妊娠を予感させる。第10章以降では、コニーの不安感や苛立ちは描かれていない。コニーは妊娠と同時に、雌鶏のように野性的な恐れを知らぬ攻撃性を持ち始める。そして、階級社会に立ち向かうことを覚悟するのである。自分には財産があり、いつでも出て行けること、たとえ離婚したとしても精神的にも経済的にも自立できることをメラーズに打ち明け、自分が主体性を持った存在であることを主張しはじめる。

このように、コニーは、物語の冒頭から第10章に至るまでに、母性本能を呼びおこす、様々な状況に遭遇する。そのことで、彼女の心境は大きく変化し、妊娠を強く望み、最終的に彼女の願いは叶う。その後、彼女のヒステリー症のような病状は一気に快方に向かうのである。そして、物語の結末では、子どもの養育環境を整えるためにコニーはラグビー邸を去り、クリフォードと離婚することを決意する。この決意は、コニーの家父長制および結婚制度に抗う態度のあらわれである。コニーの攻撃性や自我は雌鶏の野性的な母性本能と重なり合う。フリント夫人の赤子や雌鶏と出会うことで、コニーの母としての自我が芽生えたのである。

V. 自らの欲望に従って生きるボルトン婦人

労働者階級で、自らの従属的な立場を完全に受け入れているボルトン夫人は、コニーのような精神異常に陥ることはない。彼女は、女性の従属的な立場を利用して自らの欲望を満たす。彼女は、クリフォードを男性としてではなく、単なる患者とみなしている。そのため、彼女はクリフォードとの肉体関係を全く求めないが、クリフォードに媚びて娼婦のような振る舞いをする。そのことで経済的に安定した生活を手に入れようとしているので、ボルトン夫人の欲望は野卑に描かれている。コニーの性的欲望のほうが卑猥だと受容されがちであるが、彼女の欲望の方は、むしろ優美なものとして描かれ、ボルトン夫人とは対照をなしている。

ボルトン夫人は、自らの欲望を認識しており、それを満たす術を身につけているため、いつも正気であり、コニーのように、苛立ちや憔悴することは全くない。また、彼女は、男性との情熱的な恋愛や対等な関係を求めることもない。ボルトン夫人は、疑似的な母子関係を男性患者と結ぶことで、彼らに安堵をもたらすと同時に、自らは優越感と満足感を得ているのである。次の引用箇所にはボルトン夫人の欲望が描き出されている。

It was a queer mixture of feelings the woman showed as she talked. She liked the colliers, whom she had nursed for so long: but she felt very superior to them. She felt almost upper class. At the same time, a resentment against the owning class smoldered in her. The mas-

ters! In a question of the masters and the men, she was always for the men. But when there was no question of contest, she was pining to be superior, to be one of the upper classes. The upper classes fascinated her, appealing to her peculiar English passion for superiority.¹³⁾

(81; ch. 7)

ボルトン夫人は使用人でありながらも、上流階級に属しているような意識を持つこと、そして男性よりも優位な立場に立つことで心が満たされる。クリフォードとボルトン夫人との間に見られる関係は、産業活動の中の労使関係にすぎない。ボルトン夫人は、自分と患者は母子同然であることをクリフォードに見せつけ、クリフォードの子ども帰りを許容する。母親のようなボルトン夫人とのかかわりは、クリフォードにとって、妊娠を望むコニーといるよりも心地よいものとなる。ボルトン夫人は、雌鶏が雛に安全な養育環境を確保するかのよう、クリフォードにとって最適な環境を作り出す。彼女は自らの欲望をクリフォードの前では決して見せず、彼のペースに合わせていく。次の引用箇所は、ボルトン夫人が看護師としてこれまでどのように振る舞ってきたかを示している。

And he soon became rather superb, somewhat lordly with the nurse. She had rather expected it, and he played up without knowing. So susceptible we are to what is expected of us. The colliers had been so like children, talking to her and telling her what hurt them, when she bandaged them or nursed them. They had always made her feel so grand and almost superhuman, in her administrations. Now Clifford made her feel small and like a servant, and she accepted it without a word, adjusting herself to the upper classes.¹³⁾

(82; ch. 7)

ボルトン夫人は、職業柄、クリフォードのひどく傲慢な態度を予期していたのだったが、決してそれに抗わず、「上流社会に自分を合わせる」(“adjusting herself to the upper classes”)¹³⁾よう試みて、従属的な態度を示し続ける。

この主従関係は第10章で逆転する。この章で、寝間着代わりのガウンを身にまとったボルトン夫人が、夜にクリフォードのチェスの相手をしながら、彼を寝かしつける場面が描かれる。彼女は、クリフォードにとっての看護師でありながら、支配的な母親役を担うようになる¹²⁾。この場面で、白髪交じりのボルトン夫人は、「妙に少女っぽく」(“curiously girlish” 140; ch. 10)¹³⁾振舞っているが、山田はこれについて、ロレンスの嫌悪した「性の商品化」¹²⁾が描写されていると主張する。クリフォードとボルトン夫人の疑似的な母子関係もまた、階級や結婚制度といった社会的な通念の枠外に形成されている。自らの経済的自立のためにボルトン夫人は必死にクリフォードに媚びるのであるが、彼女は彼のために何らかの自己犠牲を払うことはない。ボルトン夫人が極度に従順な態度をクリフォードに見せたとしても、彼女はイギリスの18世紀から19世紀に見られた古典的な女性像に当てはまるわけではない。彼女は、自らの欲望に従って生きる「新しい女性」でもある。ボルトン夫人には、第一次世界大戦前の従順な女性像と、戦後の自立した女性像の両方が描きこまれている。ボルトン夫人は金銭欲や支配欲が満たされるだけで満足するので、男性との肉体関係がなくても、コニーのように狂気に陥ることはない。

ボルトン夫人がラグビー邸で母権を行使し、クリフォードを支配することで、ボルトン夫人の立場は次第に一家の大黒柱のようなものへと変化していく。作品の第7章では、「妙な話だが使用人の部屋がだんだん家のまんなかに押し出てきた」(“it was curious how much closer the servants’ quarters seemed to have come” 84 ch. 7)¹³⁾とまで語られている。マーゲットソンによると、使用人が、主人よりも上流階級気取りで、偉そうな態度を取ることは、ヴィクトリア朝時代から珍しいことではなかったと言う¹⁷⁾。さらに、マーゲットソンは使用人こそあらゆる階級の人間を知り尽くしており、人生経験が豊富だと示唆する¹⁷⁾。このことから、使用人としてのボルトン夫人の支配欲は当時の読者にとっては決して珍しいものではなかったことがわかる。

女性が持つ欲望について、シンプソンは、ボルトン夫人とメラーズの妻のバーサの支配欲を並列的に捉えており、両者の欲望のために、コニーとメラーズが犠牲になっていると言う¹⁸⁾。シンプソンは、ボルトン夫

人がクリフォードと倒錯した母子関係を築いて支配欲を満たすことと、バーサが別居後も夫を支配し続けることに共通点を見出している。シンプソンは、女性の自己中心的な欲望が人間関係を崩壊させると示唆しているのであるが、バーサやボルトン夫人の欲望によってコニーとメラーズの結末はより強固なものになったという別の見方もできる。いずれにしても、女性の欲望は人間関係に大きな変化をもたらすことをロレンスは暗示している。ロレンスは、女性の欲望が、結婚制度や階級意識を覆すほどの脅威であることを作品に描き込んだのであろう。

VI. 結論

コニーは、クリフォードとの結婚生活において、彼の妻だからという理由だけで、彼女自身の意思や自由、性的快楽といったすべてのものを奪われてしまった。コニーを自活できない病弱かつ狂気な存在にしたのは、当時の結婚制度のあり方とクリフォードの存在である。しかし、コニーは回復の術を自ら模索し、最終的には、結婚生活によって犠牲になった全てのものを取り戻していく。

ミルの著書が出版された時代から半世紀以上が経過し、女性は奴隷ではなく、自由に主人を選ぶ権利を手にした。ロレンスはこの作品の中で、女性にも子どもの父親を選択する権利があることを描き出している。ロレンスは、女性が男性と対等な関係性の中で妊娠すること、そして、理想的な養育環境を整えることがいかに喜ばしいものであるかを描き出したのである。このような過程で芽生える、コニーの母としての自我と養育者としての自立心は、階級制度や結婚制度を覆すくらい偉大な力を持つ。その力強さにロレンスは敬意を示し、生き物のような子宮の神秘と女性の精神についての関連性を作品の中で示したのである。

この作品において、クリフォードに支配されたコニーとボルトン夫人の両者が、家父長制の圧力から解放され、自分らしく生きていく。よって、ロレンスは、コニーとボルトン夫人の欲望や精神状態に焦点を絞って、20世紀初頭の女性像がいかに形成されたのかをこの作品に描き込んだのだと言えよう。

本稿は2019年2月に行われた、イギリス女性ライティング研究会 (SBWW : Society of British Women's

Writing) 第5回研究会 (於: 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ) の口頭発表原稿を大幅に修正・加筆したものである。

【注 釈】

注1) アメリカ精神医学会 (APA) が定めた基準として次のようなものがある。1. 自分が重要であるという誇大な感覚、2. 限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。3. 自分が「特別」であり、独特であり、他の特別なまたは地位の高い人達 (または団体) だけが理解しうる、または関係があるべきだ、と信じている。4. 過剰な賛美を求める。5. 特権意識 (つまり、特別有利な取り計らい、または自分が期待すれば相手が自動的に従うことを理由もなく期待する) 6. 対人関係で相手を不当に利用する (すなわち、自分自身の目的を達成するために他人を利用する)。7. 共感の欠如: 他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしなない、またはそれに気づこうとしない。8. しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思ひ込む。9. 尊大で傲慢な行動、または態度¹⁹⁾

注2) 文学上では、19世紀末以降、ボルトン夫人のイメージこそが典型的な看護師のイメージだと考えられていた。アン・ハドソン・ジョーンズは、『看護師のイメージ』の序論で、19世紀末から20世紀のフィクションに登場する看護師のイメージは、女性をめぐる文化一般の混乱を反映しているという²⁰⁾。看護師が、身体のプライベートな部分を見たり触ったりする点においては時としてエロティックな存在にもなりうる²⁰⁾。ジョーンズは、男性がベッドサイドに天使のような女性がいることを望むために、理想的な女性像に混乱が生じるのだと主張する²⁰⁾。

【文 献】

- 1) Rosenhan Claudia. All her faculties: the representation of the female mind in the twentieth-century English novel. Switzerland: Peter Lang; c2014. 70 p.
- 2) Daleski H M. The forked flame: a study of D. H. Lawrence. Madison: University of Wisconsin

- Press; c1965. 264 p.
- 3) Millet Kate. *Sexual politics*. New York: Doubleday; c1970. p. 240-41
 - 4) Squires Michael. *The creation of Lady Chatterley's Lover*. Baltimore: John Hopkins University Press; c1983. p.180-81.
 - 5) ルソー著, 今野一雄訳: エミール (下), pp. 18-19. 岩波文庫, 東京, 1979.
 - 6) ストーン, L著, 北本正章訳: 家族・性・結婚の社会史—1500年—1800年のイギリス—, pp. 298-99, 勁草書房, 東京, 1992.
 - 7) Rademacher Marie Géraldine. *Narcissistic mothers in modernist literature: New perspectives on motherhood in the works of D.H. Lawrence, James Joyce, Virginia Woolf, and Jean Rhys*. Bielefeld: Transcript Verlag; c2019. 11p.
 - 8) Showalter Elaine. *The female malady: women, madness, and English culture, 1830-1980*. New York: Penguin; c1985. p. 125-29.
 - 9) バンクス夫妻著, 河村貞枝訳: ヴィクトリア時代の女性たち—フェミニズムと家族計画—, pp. 132-51, 創文社, 東京, 1980.
 - 10) ミル, J.S.著, 大内兵衛・大内節子訳: 女性の解放, p.85, 岩波文庫, 東京, 1957.
 - 11) Rich Adrienne. *On lies, secrets, and silence: selected prose*. New York: Norton; c1979. p. 91.
 - 12) 山田晶子: D.H. ロレンスの長編小説研究—黒い神を主題として—, pp. 382-96, 近代文芸社, 東京, 2009.
 - 13) Laurence D. H. *Lady Chatterley's Lover*. London: Penguin; c2006.
 - 14) トリヤ・エティエンヌ著, 安田一郎・横倉れい訳: ヒステリーの歴史, p. 23, 青土社, 東京, 1998.
 - 15) ユベルマン, ジョルジュ=ディディ著, 谷川多佳子・和田ゆりえ訳: ヒステリーの発明 (下), p. 10, みすず書房, 東京, 2014.
 - 16) 吉村宏一, 田部井世志子 他: D. H. ロレンス書簡集III 1912, p.411, 松柏社, 東京, 2005.
 - 17) Margetson Stella. *Victorian high society*. London: B.T Batsford; c1980. p. 155-72.
 - 18) Simpson Hilary. *D.H. Lawrence and feminism*. London: Northern Illinois University Press; c1982. 140 p.
 - 19) American Psychiatric Association 編, 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳: DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル, p. 661, 医学書院, 東京, 2004.
 - 20) Jones Anne Hudson. *Images of nurses: perspectives from history, art, and literature*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press; c1988. XX p.

【Abstract】

D.H. Lawrence portrayed the relationship between typical female madness and motherhood, and womanhood on the whole in his novel *Lady Chatterley's Lover*. The ideas of birth control, childcare and women's liberation between the late 19th and early 20th centuries are also taken into consideration for the interpretation of this story.

This paper mainly focuses on the process of physical and psychological change in the female protagonist, Connie, especially the status of her uterus, frequently mentioned in this story. In the early 20th century, it was widely believed, even by medical experts, that madness or hysteria was caused by disorders of the uterus and excessive sexual frustrations. This idea is reflected in Connie's physical and mental condition. Connie has sexual frustrations and suffers from inexplicable irritations and madness before having an illicit sexual relationship with Mellors, the servant of her husband, Clifford. The symptoms of hysteria completely disappear after she strongly wishes to be a mother and becomes pregnant.

In contrast to Connie, Mrs. Bolton, Clifford's nurse is always sane and has the correct senses as a professional. Her maternal affection provided to her patients is compared to that of Connie in order to clarify Lawrence's views of ideal motherhood and womanhood. As an expectant mother, Connie becomes aggressively protective of her child and decides to divorce Clifford, while adjusting the environment to bring up her own child. On the other hand, in order to fulfil her duty, Mrs. Bolton provides physical stability and a comfortable environment to Clifford by superficially taking the role of his mother.

Overall, female madness and motherhood are both threats to the man-dominated family system. Lawrence insists on equality between men and women, and the liberation of women from marriage institutions.